

「母の日」の頃になると、ベランダの赤いカーネーションが咲き始めます。今は様々な色のカーネーションがありますが、子どもの頃は赤、白の2色の記憶しかありません。教会では「母の日」を



お祝いし、母に感謝して、カーネーションをプレゼントしたり、飾ったりしたものです。存命のお母さんには赤のカーネーション、帰天したお母さんには白のカーネーションを、などと聞きましたが、悲しい気持ちの子どもがいるということには、その頃、あまり思い至りませんでした。花言葉は「無垢で深い愛」ということで、母のためにピッタリの言葉です。

私の祖母と母は共に、14歳で母を失っています。祖母は父親が再婚せず、その代わり、長女の自分が主婦がわりに家事を引き受けなければなりません。祖母は貧しい家計を支えるために、また、弟妹を育てるために、身を粉にして、一心不乱に働き通しました。けれども、父親の愛情をいっぱい受け、自由に、自分の思うように、家の中を切り盛りできたのです。親孝行で表彰されたほど、父親への思いが強かった人です。

一方、母は、父親が後妻を迎え、弟妹が生まれて、義理の複雑な関係ができました。信用第一にして、平穩に家業を続けるために、母は忍耐しました。教会に行くことが、母の心の安らぎになったようです。祖母は女ながら剛毅な性格で、愚痴をいうことも弱気を吐くこともありませんでしたが、実家に遠慮する母を見て、「本当に気の毒だ、可哀想だ」と同情していました。

祖母も母も、娘盛りに母を失い、どんなに寂しかったことでしょう。自分の寂しさをわが子に味合わせてはならない、と祖母も母も懸命でした。子どもを愛し、母を慕う思いが強かった祖母と父の関係を見て、母は「母子定着型、マザコン」と評したほどでした。また、子どもがやりたいことをすべて許す母を、「子どもを我儘に育てている」と祖母が言ったものです。

母は牧師である父にとって、仕事上の重要なパートナーであり、代理もできるほど十分働き、しかも陰で黙って支える人として徹していました。父は母にどれだけ助けられたか分かりません。母はいつも黙々と働いていました。子どもの時から、秘かな祈りの中に自分の居場所を得て、孤独に生きていたと思います。母は甘え合う人間関係を持つことはなかったでしょう。母の口癖は、父には「花瓶の水」となって隠れて助け、子たちへは「地上では旅人」でした。本当に安らぐことのできる居場所は、地上にはない、天にあるのだと言うのです。母の心に刻んだ聖書の言葉は、「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」(ロマ 12:20)でした。母にはやはり、秘かに、敵と思わずにいられない相手がいたのです。けれども敵の悪に負けてはならない、「善を持って」勝とうという強い信仰がありました。



母の生涯は、戦争を挟んだ激動の時代でもありましたから、私とは比べられない、過酷で、忍耐の必要なものだったと思います。母と話していると、飽きることがありませんでした。記憶力が良く、実によく覚えていて、同じ話を聞くことになるのですが、すっかり、覚えてしまいます。今、このようにのんびりと時間を過ごしているのだから、母と話せたら、どんないいかと、母を恋しく思ってしまう。昨日、「母の日」のために、お嫁ちゃんが用意したブーケと贈り物を持って、息子がはにかみながら玄関に立ちました。「これ」と言って差し出すだけでしたが、このように心にかけてもらって、私は幸せな母です。